

研究集会 「フランス文学と愛」

趣旨説明——恋愛論の源流へ

藤原真実

(首都大学東京)

2016年10月26日、首都大学東京南大沢キャンパスにおいて、研究集会「フランス文学と愛」を開催した。本研究集会は、平成28年度日本学術振興会科学研究費基盤C 課題番号15K02382「17-18世紀フランス文学における「恋愛論争」の間テクスト的研究」(藤原真実)、および平成28年度首都大学東京・教育改革推進事業「国際性を育む分野横断的な「比較文学」教育プログラム」(西山雄二)の共催、さらに首都大学東京人文・社会系、フランス語圏文化論教室の協力により実現した。国際哲学コレージュからジゼル・ベルクマン氏を招聘し、所属の教員と学生、学外の教員や学生など、約60名が参加する充実した研究集会となった。以下では、本研究集会のテーマについて、簡単に説明しておきたい。

本研究集会の日本語プログラムのタイトル「恋愛論の源流へ」とフランス語プログラムタイトル« Pour remonter le fil du débat sur l'amour »の間には若干の違いがある。「le débat sur l'amour」を訳せば、「恋愛論」ではなく「恋愛論争」となるだろう。恋愛論は一人でもできるが、恋愛論争は複数の書き手あるいは話し手が意見を戦わせなければできない。したがって、欧文タイトルは翻訳としてはやや不正確なのだが、あえて直さなかったのは、この研究会では両方のことが問題になるからである。

いつの時代にも、恋愛論は繰り返し書かれてきた。数ある恋愛論の中でもまず頭

に浮かぶのは、グロワザール氏が論じるプラトンの『饗宴』とマルシリオ・フィチーノによるその注釈（十五世紀）である。また十二世紀フランスで書かれたアンドレ・ル・シャプランの『宮廷風恋愛について』、あるいは時代を下って、スタンダールの『恋愛論』なども、重要な恋愛論として知られている。これらの著作はまさしく「恋愛論」そのものだが、その一方で、フランス文学の歴史の中には、物語であると同時に恋愛論でもあるようなフィクションが多数存在し、恋愛をテーマとする後続の文学作品が参照する文献として、重要な役割を果たしてきた。そのような作品として、ギヨーム・ド・ロリスの『薔薇物語』（十三世紀）、オノレ・デュルフェの『アストレ』（十七世紀）、さらに少し後に書かれたスキュデリーの『クレリ』を挙げることができる。

マドレーヌ・ド・スキュデリーの『クレリ』¹は、あまりにも長大なせいか、今日ではほとんど読まれていないが、この作品が発表された十七世紀後半から十九世紀にかけて、フランスを中心に非常によく読まれていた。本作品の背景は、暴君タルクティニウスの治世から共和制へと向かうローマである。いわゆる枠物語で、主筋の枠の中に、登場人物たちが語り合う多数の物語が埋め込まれている。物語の合間のみならず、物語の中でも、登場人物が様々なテーマを巡って議論するところがこの作品の特徴と言える。複数の登場人物が恋愛論を開陳するだけでなく、人物間で恋愛をめぐる討論が繰り返されるところが特に興味深い。そうした物語世界内の恋愛論争のさなかに、主人公クレリが描いたのが、本研究集会のプログラムの表紙にある「恋愛地図」である。

「恋愛地図」とは、人と人の間に芽生えた友情が愛情へと発展したり減んだりする過程を示す寓意図である。「恋愛」と訳すのは実は不正確で、スキュデリー嬢は「タンドルの地図」と名づけているが、Tendreとは、『クレリ』の中で称揚される一種の愛情 « tendresse » に由来する寓意的な地名で、意味するところは、性愛とは区別される無償の愛、愛他主義にもとづく愛情である。タンドルの地帯を潤す三本の河はそれぞれ「好みInclination」「評価Estime」「感謝Reconnaissance」と呼ばれ、それぞれのほとりにタンドルの町が形づくられている。それらの河はみなタンドルを越えたところにある「危険な海Mer Dangereuse」に注ぎ、その向こうに「未

¹ Madeleine de Scudéry, *Clélie, histoire romaine*, Paris, 1654-1660, 5 vol.

知の世界Terre Inconnue」が広がっているが、それらの地帯が性愛に関係づけられると考えられる。

この寓意図でタンドルの地へ到達するには三通りの方法がある。一つ目は「好み」の大河を一気に下って行く方法で、外見の美しさに一目惚れする場合がそれに当てはまる。二つ目は陸路で「評価」のタンドルを目指す方法で、途中には才気に関係する寓意の町が点在している。三つ目は陸路で「感謝」のタンドルへと向かう方法である。まず「心遣い」に立ち寄り、その後は「服従」、「こまやかな配慮」、「足繁く通うこと」、「熱意」、「多大な尽力」、「思いやり」、「真心の愛」、「忠誠」、「変わらぬ好意」を経るという道筋、つまりひたすら相手のことを思い、相手に尽くした結果、「感謝」によってタンドルの地にたどり着く方法である。クレリが定義する「タンドル」の性質をもっともよく示しているのは、このルートで辿り着く愛の世界だと言える。

「恋愛地図」は当時（十七世紀後半）の文学サロンに恋愛論争を巻き起こし、その結果、多数の作品がこの寓意地図のロジックに従い、そこに提起された問題への答えとして書かれた。そのような作品の中には、ラシーヌの悲劇『ペレニス』やラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』のような小説も含まれているが、最も顕著な例として、妖精物語群を挙げることができる。

「妖精物語」は十七世紀後期のフランスで生まれた文学ジャンルである。単なるおとぎ話ではなく、文学作品の伝統に培われたきわめて文学的な性格を持つが、このことは長い間知られてこなかった²。それらの物語群をよく読んでゆくと興味深いことがわかってくる。すなわち、各作品は主人公たちに醜さと美貌、愚かさと才気、邪悪さと善良さなどを多様な組み合わせで付与しながら、みな一つの問い——友情はいかにして恋愛に発展するのか、という問いに答えようとしていること、文学サロンに集う人々が会話し議論するように、複数の作品の間で恋愛をめぐる対話や討論が展開されているということである。こうした相互関係性の流れを遡ってゆ

² マルク・ソリアノのシャルル・ペロー研究に異議を申し立て、妖精物語の高度な文学性に光を当てた画期的な研究として、次の論文がある。Marc Fumaroli, « Les Contes de Perrault, ou l'éducation de la douceur », *La Diplomatie de l'esprit*, Gallimard, coll. « Tel », 1998, p. 441-478.

くと、スキュデリー嬢の『クレリ』の中で展開される討論会、そして恋愛地図の問題提起に行き着くのである。

筆者の知るかぎり、これらの物語間の論争のもっとも興味深い結実は、ヴィルヌーヴ夫人作『美女と野獣』（一七四〇）³である。このオリジナル版は、ディズニー版の元になったボーモン版とはだいぶ異なるが、その一番の特徴は、主人公ベルが、醜く、才気も地位もない、ただ善良なだけのベツトを愛するようになるまでの厳しい葛藤を生々しく描いていることである。そのようなストーリー展開は、当時の物語では異例だが、恋愛論争の流れを遡ってゆくと、それが恋愛地図の「感謝にもとづくタンドル」へのルートを忠実に辿っていることがわかる。

このように、ただの昔話のように思える物語の中にも、きわめて文学的なテキスト間の関係性が認められる。この関係性から恋愛論争を辿ってゆくと、個々の作品を読んだだけではわからないことが見えてくる。そうした恋愛論、および恋愛論争が、フィクションの力によってさらなる活気を与えられたことは言うまでもない⁴。

もっとも「恋愛地図」はこの間テキスト性の唯一の起源ではない。スキュデリーはオノレ・デュルフェの著作と深い対話をし、デュルフェはルネサンス期のフィチーノをはじめとするネオ・プラトニズムの思想家たちと、さらにフィチーノはプラトンと、愛をめぐる対話をした。それらの著作へと過去を遡り、テキストの相互関係性を掘り起こしてゆくことで、私たちの近代文学の理解をさらに豊かに深めることが、本研究集会のねらいである。

³ Gabrielle-Suzanne de Villeneuve (1685-1755), *La Belle et la Bête*, dans *La jeune américaine (sic) et les contes marins*. La Haye, Aux dépens de la Compagnie, 1740, 2 tomes en 1 vol. ガブリエル・シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ『美女と野獣〔オリジナル版〕』藤原真実訳、白水社、2016。

⁴ それらの間テキスト性については、次の拙論を参照のこと。「怪物と阿呆——「美女と野獣」の生成に関する一考察」、『人文学報』第391号（2007）、p.47-87. p.539-559. 「「恋愛地図」で読む『美女と野獣』——連作的読解の試み」、『人文学報』第466号（2012）、p.1-39. « Une lecture de *La Belle et la Bête* selon la Carte de Tendre », *Dix-Huitième Siècle*, Paris, n° 46 (2014), 「「恋愛地図」の討論会——『とさか毛のリケ』の場合」、『人文学報』第511号（2015）、p. 321-339.

とりわけマルシリオ・フィチーノの『饗宴』注解は、「プラトニック・ラブ」という表現の出どころと言われるだけに大きな重要性を持つが、プラトンの『饗宴』と同様、実際に読みこなすのは難しい。それだけに、本研究集会で、プラトンとフィチーノの著作について、西洋古典学の専門家であるグロワザール准教授に講演していただいたのは有意義であった。また第二部では、音楽に造詣が深い大久保康明教授が、ご自身による歌唱を通してロンサルからプレヴェールまでのフランス詩における恋愛を論じられた。さらに第三部では、ベルクマン氏が十八世紀フランスの二大傑作『マノン・レスコー』と『新・エロイズ』について講演された。これらの小説もまた、物語でありながら恋愛論あるいは恋愛論争でもある小説として、後続の文学に重要な影響を与えている。興味深いのは、ベルクマン氏が取り上げた二編の十八世紀小説の中にも、グロワザール氏が論じたプラトン主義的愛の観念との対話の関係性が認められることである。ベルクマン氏が見事に指摘した『新・エロイズ』における「面影」をめぐるサン＝ブルーとジュリーの考え方の違いは、プラトン主義における感覚界の愛と精神界の愛の関係に対応する。引用されたジュリーのことば——「それ自身により存在する存在」「存在しないもの」とは新プラトン主義における一なるものとプラトン主義における一なるものを指すのだろう。自らを「偉大なる存在」へと高めるジュリーの「霊操」は、グロワザール氏が解説した「真実への神秘的な高揚」に重なる。アルキビアデスの逸話に即して言うなら、高揚によってジュリーは「愛の領域の達人」を目指したのに対して、サン＝ブルーはいわば初心者の域に留まったと言える。

このことが示すように、「恋愛論の源流」である「プラトニック・ラブ」に遡ることで、近代小説を読む私たちの視野はすでに広がり深まっている。本研究集会の成果は、今後の私たちの研究の中で、さらに豊かに活かされることになるだろう。講演して下さったジゼル・ベルクマン氏、ジョスラン・グロワザール氏、大久保康明氏、共催者西山雄二氏、そして協力して下さった首都大学東京フランス語圏文化論教室のみなさんに心から御礼申し上げる。

最後に、本研究集会のプログラムを以下に示しておく。

2016年10月26日（水）首都大学東京（南大沢）国際交流会館

13：15-14：45 第一部 恋愛論の源流へ（中会議室）

趣旨説明「恋愛論の源流へ」 藤原真実

「イタリア・ルネサンス期の人文主義者マルシリオ・フィチーノとプラトニック・ラブ」

講演＝ジョスラン・グロワザール（本学准教授）

司会＝西山雄二（本学准教授）

コメント＝ジゼル・バルクマン（国際哲学コレッジ）

15：00-16：00 第二部 レクチャー・コンサート「フランス音楽と愛」（レストラン）

レクチャーと歌唱 大久保康明（本学教授）

ピアノ伴奏＝鈴木麻純（本学学部生）

（16：00-16：20 コーヒーブレイク）

16：20-17：50 第三部 フランス18世紀小説と愛（中会議室）

「激情的な愛から昇華された愛へ——『マノン・レスコー』と『新・エロイーズ』」

講演＝ジゼル・バルクマン（国際哲学コレッジ）

司会＝西山雄二（本学准教授）

コメント＝藤原真実